

## フィジーの半自給的集落における資源利用の決定要因

著者	西村 知
雑誌名	南太平洋海域調査研究報告=Occasional papers
巻	55
ページ	17-19
別言語のタイトル	Factors Influencing the Natural Resource Use in Semi Self-sufficient Communities: Case Studies in Fiji
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/24799">http://hdl.handle.net/10232/24799</a>

# フィジーの半自給的集落における資源利用の決定要因

西村 知

鹿児島大学法文学部

## Factors Influencing the Natural Resource Use in Semi Self-sufficient Communities: Case Studies in Fiji

Satoru NISHIMURA

Faculty of Law Economics and Humanities, Kagoshima University

### 要旨

2012年より2014年まで、フィジーのビチレブ島、バヌアレブ島において、貝類（カイコソ）に焦点を当てて、資源利用を決定する要因を明らかにする試みを行った。調査地は、ビチレブ島東部のVeivatuloa（ヴェイヴァツロア）、同島、西部のNakorokula（ナコロクラ）、およびヴァヌアレブ島のLakeba（ラケンバ）である。

この調査報告では、2011年の行ったヴィチレブ島東部のWainqanak（ワインガナケ）のデータと、同じくヴァヌアレブ島に位置する、ヴェイヴァツォア（東部）とナコロクラ（西部）の3集落に関して、カイコソ捕獲についての比較を行った。その結果、東西でカイコソに対する重要が大きく異なることが明らかになった。また、市場への距離が資源利用の点で非常に重要であることが明らかとなった。

半自給的な集落における資源利用に関しては、集落の、生態文化的多様性（Hong 2015）ならびに採捕物、収穫物の性格（特に鮮度の重要性や重量）ならびに運搬の時間・コストを考慮した生態経済的多様性が重要な要因である。この両者のアプローチを取り込み、チューネン（1826）などの経済地理学的手法を援用することは、半自給的集落の資源利用の理解の可能性を拓く。

### 調査の目的・調査方法

調査の目的は、2枚貝のカイコソの捕獲量、販売量がどのような要因で決まるかを、異なるビチレブ島の3集落、において比較することである。この集落のうち、2集落、すなわち、ワンガナケ、ヴェイヴァツロアは島の東部に位置する。これに対して、ナコロクラは島の西部に位置する。

東部と西部とは、自然環境、文化的に異なる。首都のあるスバの位置する東部では、降雨量が多いが、観光客の多いナンディの位置する西部は乾燥している。食文化に関しては、東部はカイコソを多く食べるが西部ではあまり食べない。この違いは、スバとナンディの公設市場で売られるカイコソの量を比較すれば明らかである。ナンディの市場では、カイコソをあまり見かけることができない。

これらの集落において、人口、世帯数、所得、支出などの社会経済的な特徴および、カイコソの捕獲量、販売量、消費量などについて聞き取り調査を行った。カイコソやそ

の他の村の収穫物や採捕物の販売ルートについても詳しく聞き取り調査を行った。

### 調査結果

調査を行った集落は、人口が200-250、世帯数が50前後でほぼ同じサイズである。市場からの距離に関しては、東部のワンガナケ村はスバから15kmと非常に近いが、ヴァエイヴァツロアは、スバまでその2倍の30kmである。西部のナコロクラはナンディまで30kmとヴェイヴァツロアと市場までの距離がほぼ同じである。

カイコソの採捕量については、市場で販売する「山」(heap)単位で、一週間の世帯当たり、採捕量、販売量を調査した。その結果が表1である。この表から以下のことがわかる。まずは、東部のカイコソの採捕量が、東部の9.2、4.8と比べて、2.2と非常に低いことである。さらに、東部と西部では、カイコソの商品化率(販売量/採捕量)においても対照的であることが示されている。商品化率の値は、東部は、78.3%、77.1%に対して、西部の、13.6%である。西部では、採捕量が、少ないばかりか、採捕の目的は自家消費であるといえる。

表1. フィジー3集落のカイコソ採捕の比較

		East (main market: Suva)		West (main market: Nadi)
research site	year of research	Waiqanake Y2011	Veivatuloa Y2012	Nakorokula Y2013
village profile	population	243	218	206
	no. of households	48	47	55
	distance from main market (km)	15	35	30
kaikoso	amount of catch: a (heap/week)	9.2	4.8	2.2
	amount of sale: b (heap/week)	7.2	3.7	0.3
	percentage of sale *b/a (%)	78.3	77.1	13.6

出所：河合研究グループ（河合、鳥居、小針、キトレレイ、西村）によるフィールド調査、2011, 2012, 2013.

では、東部の2集落のカイコソの採捕について比較してみよう。前述の通り、商品化率はほぼ同じであるが、採捕量、販売量は大きくことなる。この違いは、集落におけるカイコソの資源量の違いによるところがある可能性もあるが、ここで仮に、資源量が大きく異ならないと仮定するれば、市場へのアクセスが採捕量、販売量に大きな影響を与えていると考えられる。

### 調査結果が意味すること・将来的な研究の可能性

この研究結果から、まず導き出されることは、半自給的集落における資源利用において重要なことは、その集落における資源の生物学的分布およびその集落が位置する地域においてその資源を食糧あるいはその他の目的で消費する文化を強く持つか否かである。ホン（Hong 2015）は、島の活性化における議論で‘Bio-Cultural diversity’（生物・文化的多様性）に焦点を当てている。この視点は示唆に富む。調査対象とする資源が、その地域でいかに重要かは多様性を持つと言うことである。

次に重要なことは、その利用可能な資源の商品化のプロセスである。このプロセスで決定的な要因となるのは、その資源の商品としての生物学的特徴（鮮度の重要性、重量）、集落から市場へのアクセスである。このアクセスは物理的な距離だけではなく、運搬手段を使った場合の時間・コストという実質的な距離を考える必要がある。つまり、資源の商品化においては、‘Bio-Economic Diversity’（生物・経済的多様性）が有効な指標となる。

このような、二つのアプローチ、つまり、‘Bio-Cultural Diversity’ と ‘Bio-Economic Diversity’ をマトリックスとして用いると、ある島、地域における資源利用のマッピングが可能となるであろう。このようなアプローチは、チューネン（1826）などの多くの経済地理の研究蓄積を有効活用することによってさらに発展すると考えられる。

### 参考資料

HONG, Sun-Kee (2015) Island Development: Action for Locality, a paper presented at the Workshop on Creating a Global Network of Education and Research for Regional Development, Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University, Japan, January 24-26, 2015.

Thünen, Johann Heinrich (1826) Isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie : Untersuchungen über den Einfluß, den die Getreidepreise der Reichtum, des Bodens und die Abgaben auf den Ackerbau ausüben.

### 謝辞

私達の調査に快く協力していただいたフィジーの調査集落の方々に心から感謝の念を表します。